〈一 冊 の 本〉

ローレン・スレイター（著）、岩坂彰（訳）

『心は実験できるか』

紀伊國屋書店　2,400円＋税

スキナーのオペラント条件づけ実験、ミルグラムの権威への服従実験、ローゼンハンの偽患者実験、フェスティンガーの認知的不協和実験、ハーローのサルの母子分離実験、アレグザンダーの依存症実験、ロフタスの目撃者証言についての偽記憶実験、モニスの実験的ロボトミー治療…あなたはこの中のいずれかをご存知ですか？ご存知の方はどこかで心理学を学んだ経験があるのではないのでしょうか？本書はそのような方にとって必読の書といえるかもしれません。学んだことがある方なら思わず「へ～」といってしまうような、心理学の教科書に出てくる有名な実験にかかわった人たちの生の声やその背景などが描かれているからです。

本書で扱われている実験はいずれも発表当時世界を驚愕させ、その後の心理学の発展に少なからず寄与した研究ばかりです。それらについて、心理学を専攻した著者が実験者たちの周辺を取材した記録を基に、少々話に尾ひれをつけつつ、過剰な感情移入と共に語っています。また，この著者は行動力も少々過剰なようで1961年に行われたミルグラムの実験参加者を捜しだして直接インタビューしたり、ローゼンハンの偽患者実験を自らも実践したりしています。

本書のなかで私の興味を最も引いたのは、スキナーの章でした。スキナーが提唱した反射的反応の実験と観察から、人の行動を理解しようとする「行動主義」は、イメージとしてどこか人を支配しコントロールする全体主義的な思想のように受け取られているところもあるからかもしれませんが、彼ほど有名にもかかわらず世間から誤解されている心理学者はいないのではないのでしょうか。スキナーの娘デボラに関する「娘の成長記録をとるため、丸２年のあいだスキナー箱の中で育てた」、「娘は成人後、スキナーを幼児虐待で訴えたが、敗訴し自殺した」といったウワサの真相についても本書では詳しく述べられています。

その章の中でも、取材末にようやくたどりつくことができたスキナーのもう一人の娘ジュリー・バーガスが、著者へ向けて言った言葉が心に残っています。

「あなたは実際に父の『自由と尊厳を越えて』をお読みになりましたか？それともやっぱり、二次資料だけ調べるタイプの方ですか？」

ちなみに「自由への挑戦―行動工学入門　波多野進・加藤秀俊訳　番町書房（『自由と尊厳を越えて』邦訳）」は、本学図書館に所蔵されています。さて、あなたは？

（本研究所研究員　中村光伴　教育心理学）